

会話困難な患者への服薬指導の症例報告

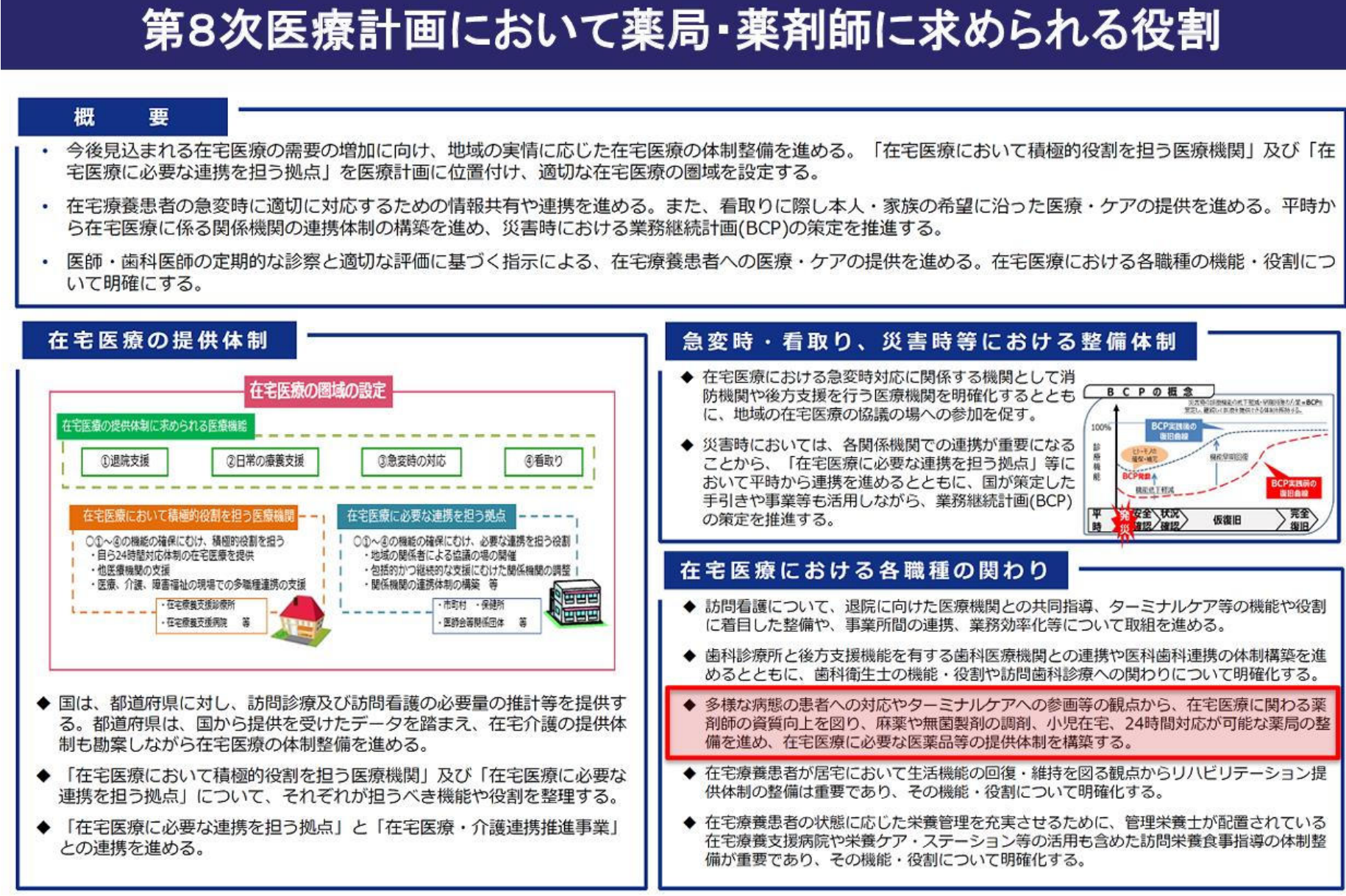


高木 正信^{1) 2)}, 加納 美知子¹⁾, 田中 祥子^{1) 2)}, 赤嶺 有希子²⁾ 赤嶺 美奈^{1) 2)}, 松尾 律子^{1) 2)}, 姜 恵元^{1) 2)}, 高安 美南¹⁾, 吉原 澄吉³⁾, 谷田 弘³⁾, 澤井 一¹⁾
和同会薬局 湯島店¹⁾, 和同会薬局 駿河台店²⁾, 一般社団法人 和同会³⁾

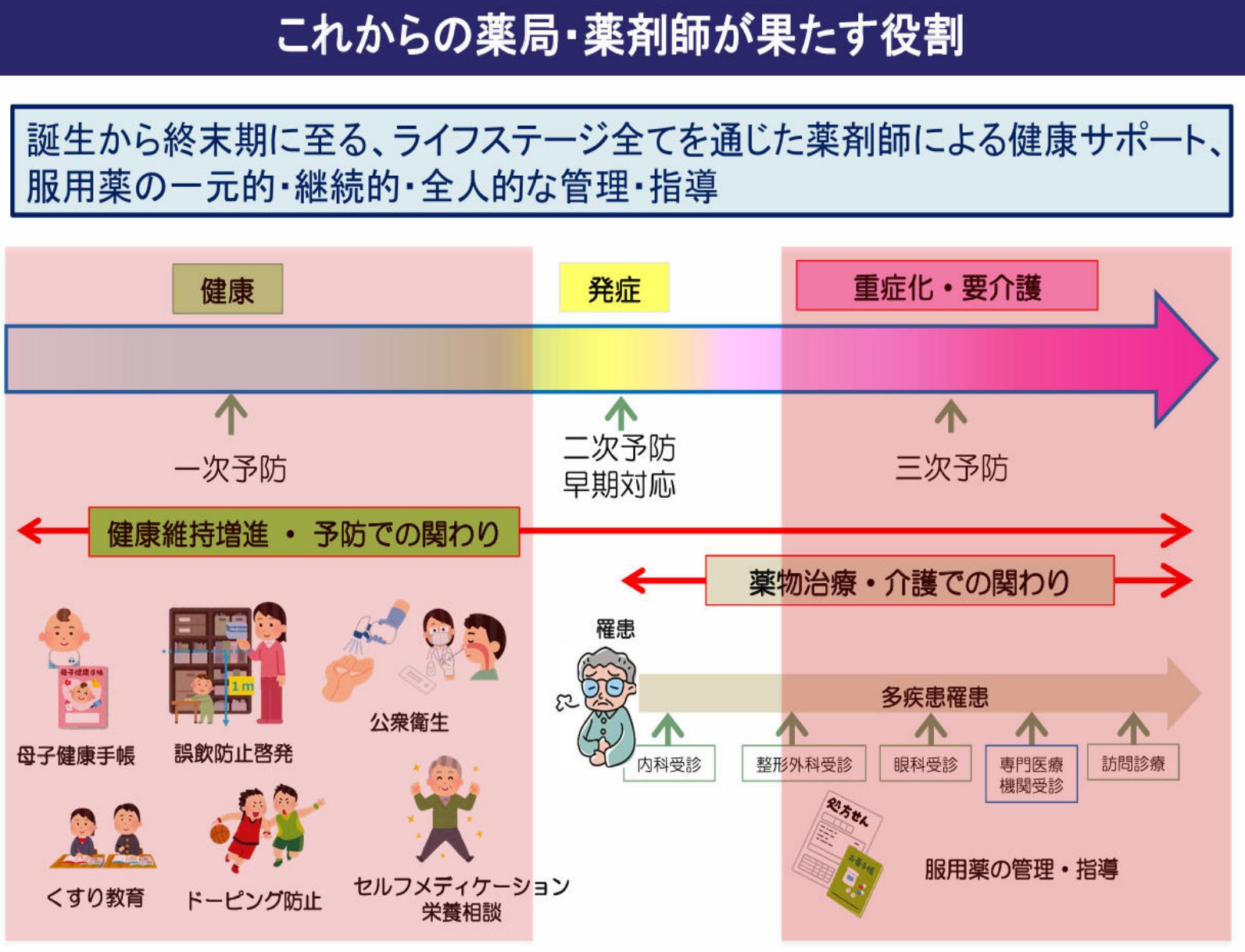
目的

当薬局は大学病院の処方を中心に応需している。また、地域に貢献する薬局として在宅業務を行っている。

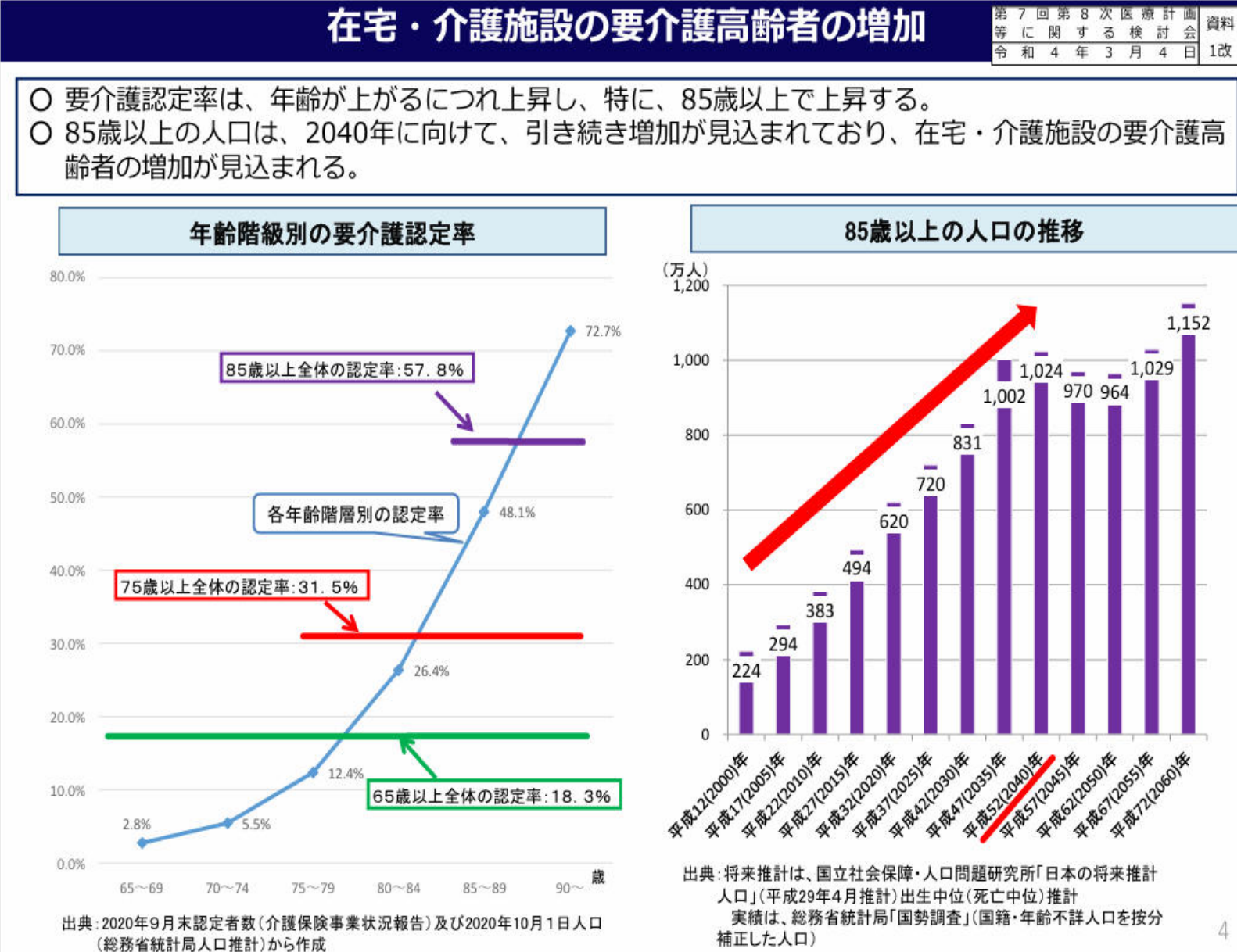
当該患者は 80 歳男性で咽頭がんのため咽頭を摘出し、家族との日常会話も困難な状態にある。当初、妻を通して服薬状況を確認していたが、妻が急逝してから、発声補助器具などを使用していないため投薬指導に苦慮していた。現在、患者は認知などなく独居で生活できている。薬剤師は、2週間に1度の訪問で在宅医からの処方薬、大学病院から調剤された定時薬をお薬カレンダーにセットしている。患者に副作用の有無の確認など一方的に話しかけ、患者のジェスチャーで確認していた。この患者のように発語ができず、意思疎通が困難な患者にどのようにアプローチできるかを解決していく。



引用：令和5年度厚生労働省委託事業「在宅医療関連調査・講師人材養成事業」在宅医療分野の薬剤師領域における役割・取組と今後について
公益社団法人日本薬剤師会 理事（地域医薬品提供体制担当） 山田武志
<https://www.mhlw.go.jp/content/10802000/001237311.pdf>
(令和6年9月15日閲覧)



引用：令和5年度厚生労働省委託事業「在宅医療関連調査・講師人材養成事業」在宅医療分野の薬剤師領域における役割・取組と今後について
<https://www.mhlw.go.jp/content/10802000/001237311.pdf>
(令和6年9月15日閲覧)



引用：令和5年度在宅医療・救急医療等の連携にかかるオンラインセミナー 急変時における在宅医療の体制整備について
厚生労働省医政局地域医療計画課 外来・在宅医療対策室
<https://www.mhlw.go.jp/content/10802000/001204032.pdf>
(令和6年9月15日閲覧)

【患者データ】
性別：男性
年齢：80代
住居：独居
要介護度2
既往歴：咽頭がん(咽頭部切除)
腹部大動脈瘤人工血管置換
胆のう炎
冠動脈狭窄症(カテーテル手術済)

患者が意思疎通に使っている筆談用の黒板

大学病院から調剤・投薬されたお薬の整理整頓



方法

- 副作用、症状、薬の効果などをチェックできるような確認シートを作り、患者に渡し訪問時に回収する。
- 患者が緊急時または、気になることがあった場合、連絡できるようファックスの使用を促す。



チェックシート
(訪問時にお渡しください)

令和 年 月 日

下痢はしていませんか □あり (〇/〇) □なし

立ち眩みはありませんか □あり □なし

浮腫んだりしていませんか(体重の変化) □あり □なし

だるくはありませんか □あり □なし

よく眠れていますか □あり □なし

食事はとれていますか □あり □なし

痰は出せていますか □出せる □出せない

薬は飲み忘れてしまうことがあるか □ある □ない

何か困っていることはありませんか

緊急！
すぐきて来てください
和同会薬局 高木宛
FAX：03-5684-3938

薬が分からなくなりました
ケアマネジャーに連絡してください
医師に連絡してください
その他

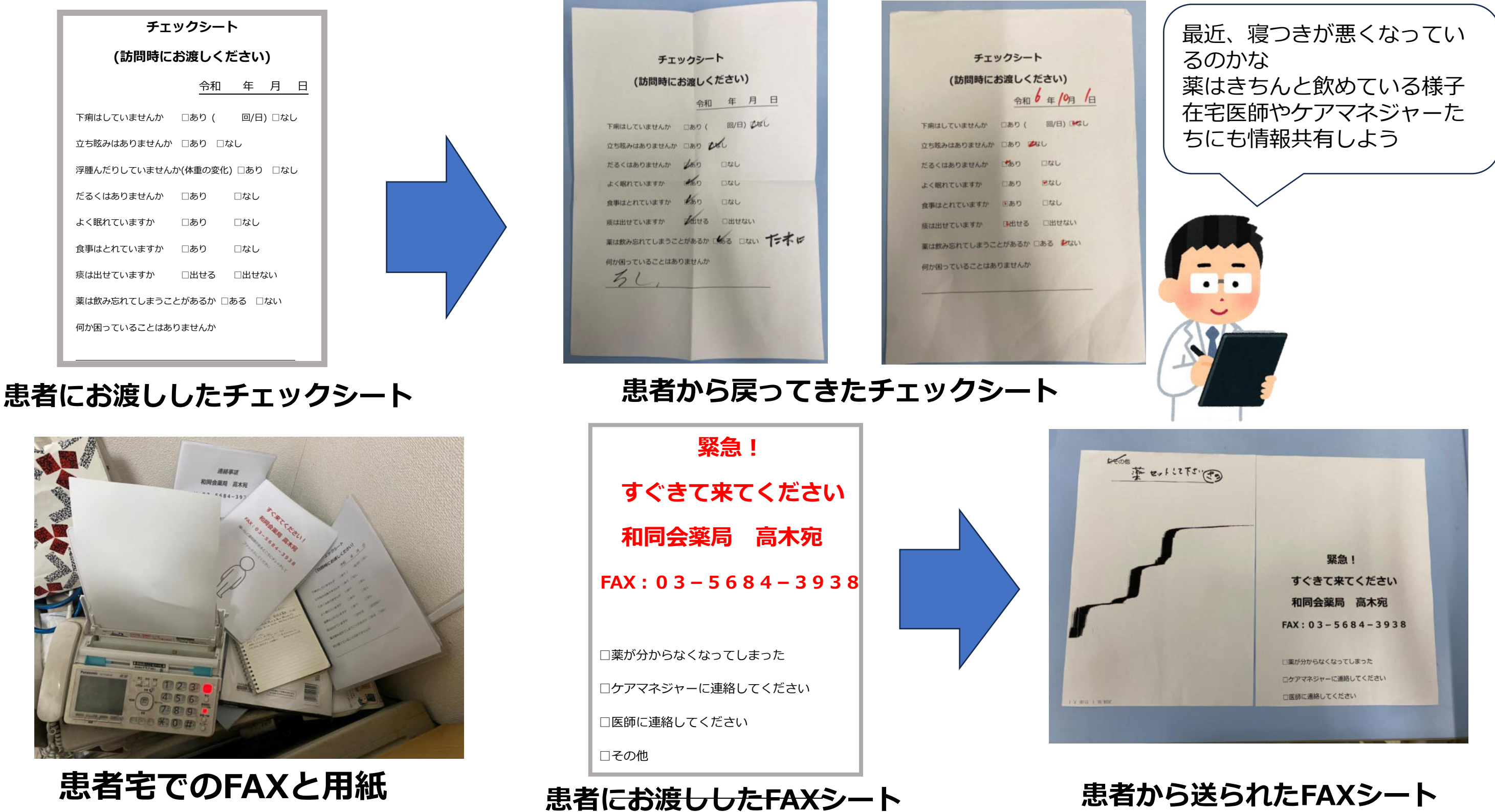
連絡事項
和同会薬局 高木宛
FAX：03-5684-3938

慶応義塾大学病院の薬を取りに来てください
薬はまだあるが、連絡を取りたい
訪問時に持ってきてほしいものがあります
その他、困ったことがあれば書いてください

当薬局で作成した、チェックシートとファックスシート

結果

訪問時の患者への服薬指導は、薬剤師が一方的に話し患者は首を縦横に振るなどのジェスチャーや筆談を用いて意思表示をしていた。薬剤師は患者は困っている事がないものと思い込んでいた。しかし、確認シート利用し患者のニーズに応えることができた。また緊急時の連絡方法を確認し患者にも安心感を与えることができた。



考察

薬剤師は、患者の声なき声に傾聴し、より良い医療を提供できる存在として共に歩むことが求められる。発語できない、会話のできない難聴などのコミュニケーションが困難な場合、患者からの訴えや症状などが十分にフォローできず、副作用の見落としといった医療安全上の問題になる可能性が危惧される。これからの課題として、様々な病態を抱えた患者に寄り添い患者の薬物治療に対し最大限の効果を発揮し、安心・安全に行うことができるかを考えていかなければいけないと考える。